

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その3 昆虫たちと話す!?)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

子供のころの愛読書に「ドリトル先生」の本があった。ご存じの方も多いと思うが、ヒュー・ロフティング原作で井伏鱒二も翻訳している子供向けの文学作品である。詳細は省くが、動物と話すことができるドリトル先生の活躍を描いたストーリーで、当時は動物と会話できたら楽しいだろうなあ、と憧れのような気持ちで読んでいたものである。その後昆虫学の世界に進んでも、「この虫と話せたら実験条件を決められるのに」なんて考えることもあるが、もちろん叶ったことはない・・・しかし私は昆虫を撮影する場面で2度ほど彼らと会話したことがある。

昔読んでいたある昆虫雑誌の表紙を飾っていたのが、キバネツノトンボ。その黄色い翅の勇姿に釘付けになった。初めて見る姿に魅了され、いつかは出会いたいと思っていたのだが、機会がなかった。ところが卒業生が生息地を知っているという。場所は栃木県の河川敷、一緒に出かけることになった。その日は5月にしては震えるほど寒く、どこを探しても姿はない。諦めそうになったときに「いました」と卒業生の声、写真を見てから実に30年目の出会いだった。

気温が低いので動きは鈍く、写真は撮れたものの何か物足りない。しばらく観察しようやく気がついた・・・翅の位置が違うのである。記憶の中のキバネツノトンボは翅を開いていたが、目の前の個体は閉じていたのだ。それがわかれば広げるのを待つしかない。でもなかなか開かない。つい「おい、翅を開いてよ」と声をかけてしまった。すると、音もなく翅を開いてくれたのである(図-1)。偶然で片付けられそうな出来事かもしれないが、私は気持ちが通じたのだと思いたい(笑)。

美しいゼフィルスも気になっていたが、翅を開いたオスを撮影する機会に恵まれなかった。今年こそは撮影したいと、まずは近場で見られるミドリシジミを狙うことにして情報収集。発生時期や少し遠いが確実に見られる場所もわかった。あとは朝の天気次第だが、週間予報では連日雨のなか1日だけ晴れの日があった。しかしその日は朝から講義・・・しかも遠い・・・でもこの日を逃すと見られないかも、という気持ちが勝り、出かけることにした。

朝4時半に起きて6時に現地に着いたが、曇っている・・・ハンノキには成虫が数匹いるが動く気配はない。6時半を過ぎたとき、曇天のなか1匹が下草に降りたので、カメラを構えた。じっと待つこと20分・・・私の願いが通じたのか、7時前に徐々に雲が晴れてきた。すると彼は日射しに体を向けて、ゆっくりと翅を広げてくれた。初めて見るオスの翅の輝きだったが、その翅は少し褪せて痛んでいた。それでも個人的には満足した。

そのとき、少し離れたところから「ねえ・・・」と呼ばれた気がした。声が聞こえた方を見ると、日射しを浴びて眩しく輝く個体がいる。近づくと傷一つない新鮮な個体である。慌ててシャッターを押した(図-2)。彼が飛んでいったあともしばらく呆然と立ち尽くしたが、ふと我に返ると大変な時間・・・大急ぎで大学に向ったが奇跡的に講義に間に合った。

今回の話は、もちろん実際に昆虫たちと会話したものではない。でも昆虫たちとたくさんふれあえば、気持ちが通う体験ができるのではないか。そして撮影の場だけでなく調査や実験でも、彼らの気持ち(?)を感じることができるよう、経験を積んでいきたいものだ。



図-1 翅を開いたキバネツノトンボ



図-2 輝く!ミドリシジミのオス